

Title	中国語語彙教育の課題と語彙学習中心の中級テキスト作成に向けての考察
Sub Title	A study on the problem in teaching Chinese vocabulary and the possibility of lexis-centered intermediate level textbooks
Author	浅野, 雅樹(Asano, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.105, No.1 (2013. 12) ,p.146 (121)- 166 (101)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山下輝彦教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01050001-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国語語彙教育の課題と語彙学習中心の 中級テキスト作成に向けての考察

浅野 雅樹

1. はじめに

語彙は音声や文法と同様、言語の構成要素の一つである。ただ、主に大学における中国語教育の場では、語彙教育が発音や文法と比較して、より徹底され、充実しているとは言い難い状況がある。近年は外国語教育の目的として、コミュニケーション能力の育成ということが強調され、学習者が「わかる」だけでなく、「できる」ことを目的とした研究や教育実践が主流であると言える。学習者のコミュニケーション能力を高めるためには、語彙力の向上は不可欠であり、学習者がより効率的に多くの語彙を習得できるように指導することが教師側にとっての課題となる。

どのような単語を、またどのくらいの数の単語を教えるべきなのかという問題は常に注視されている。ただ、学習者が語をどのように覚えて、如何にそれを長期に渡って記憶にとどめるのか。また、学習した語が理解語彙から発表語彙に至る過程や、「意味」、「形式」、「使用」の三つの面に関わる語彙能力¹⁾といった点については、教育の場やテキスト作成において重要視されているとは言えない。語彙学習は、授業で使用するテキストではなく、学習者自身が辞書や単語帳で行えばよいといった認識も教師と学習者の双方に一定程度あると言える。

中国語の語彙教育については、胡1997、万2010、高2008、李2011等、多数の論文または研究書で述べられている。また特に日本人学習者や日本の大学における語彙指導や語彙学習に関しては、興水2005、史2004、郭

2008、沈2008、朱2007等で述べられている。ただ文法や発音面と比較すると、全般的に語彙に関する注目度は低く、課題も多い。

テキスト作成時はどのような語を導入し、提示すればよいのかということが問題となるが、最近の一つの傾向として、あるガイドライン²⁾に基づき選定されるようになったという変化が見受けられる³⁾。日本の大学で使われる中級レベルのテキストは、中国の社会や文化などへの理解を高めることを目的とした、内容的には特に分化されない総合教材が圧倒的多数を占める。また場面に応じたコミュニケーションができるように、会話文が中心に作成されている教材も多い。ヒアリング用、文法用、読解用といった内容を限定した教材も一部見られる。ただ、使用者の語彙学習を中心に作成されていると見なせるテキストは極めて稀である。

本稿はこのような教育上の現状を踏まえ、まず既存の中級テキストに関する調査を行ない、語彙中心の新しいタイプの中級中国語テキスト⁴⁾（大学授業用）作成に向けて、語彙指導や語彙学習について様々な角度から考察を行うものである。

2. 中国語中級テキストに対する調査

日本で出版され、主に日本の大学で使われる中級レベルのテキスト50部に対して、以下2.1から2.5に示す5点について調査した。調査した内容は主にテキスト内の語彙に関するものである。

2.1 テキスト一課分の構成について

〈表1〉	(部数)
課文→語釈 ⁵⁾ →ポイント→練習問題	37
語釈→課文→ポイント→練習問題	3
課文→ポイント→語釈→練習問題	2
課文→語釈	2
その他	6

テキストにおける一課分の構成要素は、「課文」、「語釈」、「学習ポイント」、「練習問題」に分けられる⁶⁾。〈表1〉は中国語中級テキストにおける

一課分の構成要素とその順序を調査した結果である。ほとんどのテキストは「課文→語釈→ポイント→練習問題」という配列で一課分の構成がなされていることが分かった。その他、語釈が最初に置かれていたものが3部あったが、いずれも後に置かれる課文に応ずる重要語句を記した語注の役割を果たすものであった。

2.2 語釈の形式について

〈表2〉	(部数)
提示語－ピンイン－(品詞) 訳語	31
提示語－(品詞) 訳語	7
提示語－ピンイン	6
その他	4
語釈なし	2

〈表2〉はテキスト内の語釈の形式を調査したものである。「提示語－ピンイン－(品詞) 訳語」という形式が圧倒的に多い。「訳語」は課文に出てきた語義に相当するものだけを示すのが一般的である。また、訳語やピンインを付さずに、学習者自身に調べさせるワーク形式にしてあるものも見られた。また語釈にあたるものがないテキストが2部あった。

2.3 語釈における訳語以外の提示内容について

テキスト内の語釈の訳語については、前述したとおり、単に課文に出てきた語義に相当するものだけを示すというのが一般的である。ただ、中には以下のように様々な語彙に関する事項を示す例も一部見受けられた。

- ・ 好像：どうやら～のようだ。どうも～みたいだ。◇不確実な予測を表す。「好像」には比喩を表す用法もある。『やさしい中国語中級会話・読み物』光生館2006:17頁
- ・ 抽烟 chōuyān 喫煙する(=吸烟)『北京びより』好文出版2009:29頁
- ・ 错 cuò 間違っている(↔“对”)『中国語さらなる一歩』白水社2011:26頁
- ・ 会员卡 huìyuan kǎ ㊦ 会員カード、メンバーカード。〈卡〉カード。英語“card”の音訳語『総合中級中国語』白帝社2007:15頁

- ・ 摠“按 àn”のより口語的な言い方 『北京の明子』白帝社1999:39頁
- ・ 乾隆帝 Qiánlóngdì: 1711-1799. 清の高宗。清朝第六代皇帝。祖父の“康熙帝 Kāngxīdì”と共に康熙・乾隆時代と呼ばれる隆盛を築いた。『中国語のひととき』朝日出版社2000:59頁
- ・ 《论衡》《Lùnhéng》: 後漢の思想家王允（27-100）の著書。迷信を打破し、伝統を否定し、天人相関説をとる漢代儒教の不合理を批判する論書は30巻85編。『実用中級中国語』白帝社2012:47頁

一つ目の“好像”のように、課文中の語義に相当する以外の語義を示す語釈が一部見られる。また次の“抽烟”や“错”の例のように提示語の類義語や反義語を示す例も少数ではあるが見られた。さらに、“会员卡”や“摠”のように特殊語彙に関する記載や文体等の語用的な特徴を示すものが見られた。その他、“乾隆帝”と“论衡”の例のような人名や書名などの固有名詞について解説を加えるものが、少数ではあるが、いくつかのテキストで見られた。

2.4 関連用語と語彙索引について

課文に応じた語釈以外に関連用語の欄が設けられていたテキストが50部中13部あった。「スポーツ」、「日本の人名、地名、企業名」、「中国文化」に関連する語などの例が見られた。また語彙索引が付されているテキストは50部中26部あった。

2.5 テキストにおけるポイント（要点）の内容について

テキストの各課には、「ポイント」或いは「要点」といった見出しで、学習者が学ぶべき項目が示される。一課に五つ前後の項目が示されるのが一般的である。各項目に対して数行の解説が記され⁷⁾、その下に関連する用例文を複数示す形式が多く見られる。このたび、50部の中級テキストに対して、このポイントの部分に挙げられている内容についても調査した。ポイントの項目に挙げられる内容で多かったのは、例えば「ポイント①因为②怎么③了④终于⑤被」というように、個別の単語が語レベルで挙げられる例である。ほとんどが虚詞であり、また助動詞、代詞、量詞などの実詞

も見られたが、動詞、形容詞、名詞の例は少ない。また“一～就…”、“一边儿～一边儿…”、“就要～了”、“对～来说”、“怎么也～”、“越来越～”、“一点儿也不～”等の連語やセットフレーズをポイントの箇所に掲げる例が多い。さらに「受身構文」、「比較構文」、「“是～的”構文」、「二重目的語構文」など、文単位で挙げる例や「結果補語」、「方向補語」、「文の形をした目的語」など文成分が使用される例も多く見られた。全体的に見れば、文法的な範疇における要素、事項と見なせる例が多数を占めることが分かった。その中で、語彙論に関する事項をポイントの項目に掲げている例は、わずか延べ19例であった⁸⁾⁹⁾。内訳は「類義語」について3例、「成語」や「ことわざ」が7例、「語の文体的特徴」について2例、その他が7例であった。

2.6 調査結果のまとめ

中国の国際漢語教育においては、すでに、会話、読解、リスニング、作文などの言語的技能、また文法、語彙、発音などの言語要素に応じた様々な中級テキストが出版されている。ただ日本の主に大学で使用される中級テキストは、中国の国際漢語教育で使用されているテキストのように内容や編成が細分化されているとは言えない。

このたびの調査により、中級テキストにおいて用いられる課文の内容は多様であることがうかがえた。しかし、〈表1〉や〈表2〉を参照するとテキスト全体の構成については全般的に均一的であることが指摘できる。また2.5で述べた通り、ポイントの箇所で示される内容の大多数が文法の範疇に属する。具体的に挙げられるポイントの内容についても、テキスト間で大きな相違があるわけではなく、共通するものが多く見受けられた。

3. 語彙教育の課題について

(語彙学習中心の中級テキストの必要性について)

ここでは「語彙学習中心の中級テキストがなぜ必要なのか」という観点から、語彙教育に関する課題について、三つの側面から述べる。

3.1 指導面での課題

大学で第二外国語として中国語を履修しているような学習者が授業に関

わる学習以外に、学習や習得の機会を持つことは稀である。このような学習者の学習過程で、偶発的学習、つまり自然に単語を覚えて使用できるようになるといったことは、ほとんど期待できない。よって、常用語や重要語はテキストの中に明示し、意図的な学習による語彙習得が重要であるという点に、教師側はある程度の注意を払う必要がある。従来の語彙指導の関心は、どの程度の数を教えるのか、またテキストの中にどのような語を取り入れるのかといった「語彙の広さ」に関する問題が中心であった傾向が認められる。ただ、この「語彙の広さ」に加えて、特に中級レベルにおいては、学習者がそれらの語をどのように、どのくらいの時間をかけて覚えていくのか。さらに一つの語に関して、単に「ピンイン」と「訳語」だけではなく、それ以外の様々な語彙情報をどの程度学ばせるのかという、所謂「語彙の深さ¹⁰⁾」に関する事項を指導内容に一定程度含めることが課題である。

最近では知識の獲得だけではなく、実用的なコミュニケーション能力の養成を指導の目的とするシラバスが増加している。この目的に従えば、発音や文法と共に、語彙指導がより徹底される必要がある。学習した語彙は「読む・聞く」という理解語彙としてだけではなく、「話す・書く」といった発表語彙の段階まで、学習者に習得させることを重要視しなければならない。ただ、すべての語彙を発表語彙として学ばせる必要はなく、指導面では、この二種類の語彙に関する線引きが課題となる。また語彙の導入のみならず、学習者が語彙を学習した後、如何に長く確実に記憶に残るように定着させるのか。そして学習者がその語彙を自由自在に使用できるようになるため、如何に語彙能力を発展させる¹¹⁾のか、といったことが語彙指導の面での課題であると見なせる。

3.2 学習者の学習状況から見た課題

筆者の本務校の学生¹²⁾の学習状況を観察していると、ほとんどの学生が「テキストで学習する」、つまりテキストを通して自己の実用的な語学力を身に付けるという意識は希薄である。無論学生による個人差はあるものの、「テキストを学習する」、つまりテキストの範囲内での学習が、中国

語学習そのものであり、すべてであると考えている学生が意外に多い。このような学生は学習に対して、決して怠惰で消極的であるというわけではない。授業外活動等にはあまり興味を示さないが、授業で指定されたテキストの範囲内では、授業外の時間においても熱心、かつ継続的に自主学習し、それなりの学習意欲が見られる。外国語教育や学習において、学生のこのような態度が理想的、または効果的であるかどうかは別の問題として捉えておく必要はある。しかし、一方で授業で使用されるテキストに対する認識に関して、学習者である学生と教師の間に、多少の距離感があることは指摘できる。近年、大学の外国語教育において、授業外学習や活動が盛んに強調され、重要視され、指定のテキストを使用しない授業が増えたと見られる。ただ、このような学生の状況に照らし合わせて考えれば、授業用テキストに対する意義と位置づけを見直す必要性が問われる。

近年、電子辞書の普及により、学習者には便利な学習環境が整ったと言える。授業中は多くの学生が電子辞書を使用している。ただ便利になった反面、電子辞書を調べ、語の訳語を知ることや確認することだけが、語彙学習であると認識している学生が増えた感がある。中国語の単語とそれに相当する日本語の訳語を単純な一对一の関係で理解することが語彙学習であると誤解している学生も多い。中国語の語が持つ情報はピンインと訳語に限らず、その他にも文法的用法、語用的特徴、文化義、コロケーション、また語義のネットワークに関しての類義語、反義語、関連語などがある。一つの語を学習するというのは、これらを含めて理解することであるという認識をもつ学習者は少ない。

学習者である学生から「単語はどのように覚えるのですか。」「単語はいくつ暗記する必要がありますか。」といった質問をよく受ける。多数の単語を覚えられないことが原因で、外国語学習全体に嫌気がさしてしまうといった学生も少なくない。授業中の受け答えや定期試験の答案において、文レベルの意味は理解できるが、その文に使用されている個々の単語の意味はわからないという不可思議な現象がよく見受けられる¹³⁾。これは、学習者が単語学習を軽視し、単語に対する理解度が低く、ボトムアップ型の

理解ができていないことを示唆するものであると言える。学習者の単語を覚える際の負担感を減らし、効果的な学習により、習得するための何らかの方法を考案することが課題となる。

3.3 学習環境面（大学の授業形態）での課題

筆者の本務校の中国語教育の状況について述べると、外国語の授業を履修するのは主に1年生と2年生である。レギュラーコース（第二外国語）で履修する学生は週に1コマの履修であるが、インテンシブコース（第一外国語）の履修者は週に3、4コマ履修している。1年生の初級段階では、ピンインの学習を中心とした発音練習や基礎的な文法項目の学習を中心に、ある程度は授業内容を固定化している。一方、2年生のインテンシブコースの学生はネイティブの教師が担当する実習形式や、日本人教師が担当する読解や文法中心に分けて授業を設置してある。授業ごとに指定されるテキストがあるので、3コマの授業を履修する学生は同時に3部のテキストを用いて学習する状況にある¹⁴⁾。しかし、授業としての内容は分化しているものの、これらの授業ごとに指定されているテキストを見比べると、同じような編成のものが多い。またテキスト内の学習項目についてもテキスト間でそれほど差は見られない。1年生の初級レベルでは基礎の定着のため同じことを反復して学習することに意義があると見なせる。しかし、2年生の中級レベルでは、様々な形式や方法で学習し、言語の多面性を利用した学習環境で学習させるのが望ましいと言える。中級レベルでは、初級レベルのように一人の学生が同時に使用する複数のテキストが同様の編成や内容である必要性は低い。

前述したように、現在日本で出版されている中級テキストは、全体的にテキストの編成やポイントで示される学習項目が均一的であると見なせる面がある。教師が授業の指定教材を決める際には、ある程度異なる編成もしくは学習内容が記された多様なテキストが複数出版されている状況で、幅広く選択できるのが理想的であると言える。

無論、授業における学習内容は、その授業で指定されたテキストだけで決まるものではない。ただ前節でも述べたように、ほとんどの学生は自主

学習において、授業で使用するテキストにほぼ完全に依拠しているという状況を考慮に入れば、一人の学生が同時にどのような複数のテキストを使用しているのかという点は軽視できない。

4. 語彙学習中心の中級テキスト作成に関する考察

本章では新しいタイプの語彙学習中心の中級テキスト作成に向けた考察を行う。

4.1 テキスト一課分の構成について

2.1の〈表1〉で示したように、一課の構成が「課文→語釈→ポイント」という配列を用いるテキストが多い。教師は授業時、必ずしもこの順に従って進めるわけではなく、最初に単語の語釈の部分を説明したり練習させたりすることがある。或いは、ポイントの部分から課文に進むという順序も考えられる。ただ学習者が自主学習する際は、やはりテキストの構成通り「課文→語釈→ポイント」という順で学習する場合が多いと考えられる。この配列に応ずれば、学習者は一つの語を「文章レベル（課文）→単語レベル（語釈）→単文レベル（ポイント）」という順で見ていくことになる。この順序は決して語彙学習に適しているとは言えない。これを言語の単位に応じ「単語レベル（語釈）→単文レベル（ポイント）→文章レベル（課文）」とすることにより、学習者の語彙学習にとって、より適した一課分の構成となり得る。また、このように配列すれば、テキスト作成の段階で、ただ課文に応じて単語を導入し、提示するという従来の方法を変えることができる。つまり、語彙を中心とした学習の観点から、まず重要な単語を取り出し、ポイントや課文はそれにしたがって作成するという方向性が可能になる。

4.2 課文に応じた「提示語－ピンイン－訳語」という語釈に換わる語彙提示の方法

2.2で示した「提示語－ピンイン－訳語」という語釈の形式は、必ずしも学習者の語彙学習にとって効果的であるとは言えず、検討の余地がある¹⁵⁾。語に関する情報はピンインや訳語だけではない。さらに語形や語義などに

ついで様々な特徴がある¹⁶⁾。2.3で述べた通り、これら語彙論の領域における事項は一部の中級テキストの語釈の部分で散見される。ただ、全体的に見れば、「提示語－ピンイン－訳語（品詞）」という形式で課文に出てきた語義に相当する訳語だけを示す語釈が圧倒的に多い。語彙中心のテキストを作成するためには、より多くの語彙に関する事項を提示するのがよい。単にテキスト著者の主観的な判断で示すのではなく、例えば形容詞には反義語を示す。二音節動詞には可能な限り、同じ形態素を持つ類義語を示す。また語構成の面で接辞を含むものには、それを注記するというように、ある程度は体系性に応じた示し方が適している。また語彙をテキストへ導入する際についても、課文に応じて導入し、配列するのではなく、「品詞」、「意味分類」、「常用度（頻度）」、「難易度」等の語彙自体の特徴に依拠し、提示する方法が考えられる。

本稿では「日本語と中国語の語彙の関係」に依拠したテキストへの導入方法を提案したい。日本人の中国語学習者、とりわけ初級から中級にかけての学習者は日本語の語彙のイメージから中国語の語彙を理解しようとする傾向がある。テキストにおける語彙の導入に関して、これを上手くプラスの方向に向かわせる形で、日本語との関係を利用することが可能である。中国語の語彙は日本語語彙との関係で、「同形同義語」、「同形近義語」、「同形異義語」、「異形同義語」に分類できる¹⁷⁾。基本的にこのような分類に依拠した上で、単語を導入する他、提示する内容も「ピンイン－訳語（品詞）」というように一律にするのではなく、差別化できる。以下に示すのは、テキスト－課分の単語導入と提示方法の試作例¹⁸⁾である。

【単語】

(≈は類義語、⇔は反義語、*は関連語「日本語語彙の語義と関連する語」を示す)

A. 次の単語の意味を確認し、書いて覚えましょう。

伊妹儿 yīmèir: Eメール（“电子邮件”とも言う） () () ()

抱歉 bàojiàn: すまなく思う () () ()

四合院 sìhéyuàn: 是中国传统的住宅，四周是房子，中间是院子。
() () ()

春节 Chūnjié: 农历正月初一，中国最隆重的节日之一。

() () ()

联系 liánxi: 連絡する

() () ()

B. 点線が引かれた部分に注意し、また右に示す語句や用例文を参考にして、
次の単語の意味を考えてみましょう。

旅游 lǚyóu : 旅行，“旅游事业”，“参加一个旅游团去美国”

所见所闻 suǒjiànsuǒwén : 见闻，所作所为

啤酒 píjiǔ : 葡萄酒，白酒，罐装啤酒，瓶装啤酒，“喝啤酒”

交谈 jiāotán : 会谈，商谈，“你们在一起交谈交谈吧”，“交谈了一个下午。”

顺利 shùnlì : 顺风，“我最近工作很顺利”

C. 次の単語の下線部の簡体字を日本語漢字体に直し、さらに () 内に
ピンインを書いて覚えましょう。

幸运 [] xìngyùn : () () ()

工业 [] gōngyè : () () ()

突 [] rán tūrán : () () ()

政治 zhèngzhì : () () ()

健康 jiànkāng : () () ()

D. 次の単語は日本語と語形は同じでも、意味や用法は多少異なります。日本語との違いに注意して覚えましょう。

照 zhào : 「照る」という意味の他、「(鏡に) 映る」、「(写真を) 写す」、「面倒を見る“照顾 zhàogu”」、「許可証“执照 zhízhào”、パスポート“护照 hùzhào”」など、多くの意味がある。≈ 拍 pāi、* 写 xiě

一切 yíqiè : 「すべて」「あらゆる」という意味である。ただ、日本語の「一切」のように後に否定の語を伴って「いっさい(まったく)～しない」のような意味を示す副詞的な用法はない。“一切都”の形でよく用いられ

る。“这里的生活一切都很好” ≈ 所有 suǒyǒu、* 根本 gēnběn

新奇 xīnqí : 日本語の「新奇」と比べるとやや口語的である。日本語の「珍しい」の意味に近い。“感到新奇”、“到了奥运村,我感到什么都很新奇”
≈ 新鲜 xīnxiān、⇔ 普通 pǔtōng

亲切 qīnqiè : 多くの場合「身近に感じられること」や「親しみがあること」を示す。“我在上海住了两年,所以我对上海感到十分亲切” ≈ 热情 rèqíng
⇔ 疏远 shūyuǎn * 好意 hǎoyì

希望 xīwàng : 後ろに動詞句や主述句を目的語にとることが多い。また「…できたらよいと思います」といった「やや軽い願望」にも用いられる。
“我希望将来当一名小学教师”、“我很希望你们来参加明天的联欢会” ≈ 期望 qīwàng、≈ 愿意 yuànyì

E. 次の単語は日本語と同じ語形でも全く意味が異なります。右に示す用例を参考にして意味を考えましょう。

马上 mǎshàng : “开往上海的列车马上出发”、“等一会儿,他马上就回来”
≈ 立刻 lìkè

深刻 shēnkè : “深刻的体会 / 印象”、“理解得很深刻” ⇔ 浅薄 qiǎnbó
* 严重 yánzhòng

冷 lěng : “这里冬天非常冷。” ⇔ 热 rè * 凉 liáng

场 chǎng : “两场大火”、“生了一场大病”、“这场地震造成了什么影响?”、(场 chǎng: “看了一场精彩的比赛”, “今晚有两场电影”, 操场, 上场)

祝 zhù : “祝你一路平安”、“祝你明年的考试成功” * 祝贺 zhùhè

日中異形語をさらに二つに分け、計5つのタイプの分類に依拠し、テキストへ導入する。まず、上の「A」は「日中異形語 (学習者が語形からは全く語義が推測できないもの)」である。訳語を付け、また語形のイメージを強めるため書かせる。また文化義を含む単語については、簡単な中国語で注釈をつけるといった工夫をする。次の「B」も「日中異形語」であるが、

単語を構成する一部の形態素等により、日本人学習者には、ある程度は語義が推測できるものである。例のように、単語と同じ形態素が構成要素である単語をいくつか提示する。また用例文を提示し、単語の語義を考えさせる。単に訳語を付すのではなく、まず学習者に語義を考えさせるという方法を取る。考えさせることによって、学習した語彙をより長期に渡って記憶に残るようにするという効果をねらう。次の「C」は「日中同形同義」とされる語で、日本人にとっては最も習得しやすいタイプである。語義より、語の発音のイメージを強調するためピンインを何度か書かせて練習させる。また文字の範疇になるが、例えば“幸运”、“工业”の“运”が“運”、“业”は“業”であるというように、簡体字に対応する日本語の漢字を書かせる。文字の対応関係を理解させることにより、効果的に単語を学習させるというのがねらいである。次の「D」は「日中同形近義語」であるが、これは日本人の中級レベルの学習者が最も徹底的に学習する必要があるタイプであると言える。日本人学習者が元々持つ中国語の語彙学習についてのマイナスの面は、このタイプの語彙をマスターすることにより克服できると言っても過言ではない。そこで、「同形近義語」については訳語や用例文だけではなく、誤用を防ぐため同じ語形の日本語語彙との違いを明記する。さらに附属義や語用的特徴、コロケーション、類義語や反義語なども含めて、テキスト内に詳細に提示する。最後の「E」は「日中同形異義語」である。日本語の語義との違いの印象を強めるため、用例文を提示し、それを参考にして、その語の語義を考えさせる。やはりここでも、単に訳語を付すのではなく、考えさせて記憶に長くとどめ、誤用を防ぐのがねらいである。その他、反義語や関連語等も示す。

4.3 ポイント（要点）の箇所に語彙論に関する事項を取り入れる

語句指導と語彙指導という考え方がある¹⁹⁾。現在使用されている主なテキストを観察すると、読解のための語句指導を超えた語彙指導が含まれる内容の提示というのは、ほとんど見受けられない。コミュニケーション能力を向上させるために、学習した語を実際に使用できるようにすることが学習目的としてよく定められる。このような目的を達するためには、まず

中級レベルにおける語彙学習の重要性を強調し、学習者の語彙学習に対する意識を高めることが肝要である。このためには、語句指導だけではなく、テキストにおいて何らかの方法で語彙指導ができるような内容の提示をする必要性が認められる。一つの方法として、語彙論における事項を明示的な知識として、テキスト内に示し、学習者が明示的学習を通して語彙論的知識を獲得できるようにするということがある²⁰⁾。2.5で述べたように、中級テキストのポイント（要点）の部分では、大多数が文法に関する事項が挙げられ、全体的に見ると内容は均一的である。そこでテキストにおけるポイントの箇所に語彙論に関する事項を盛り込むことを提案したい。中級レベルの学習者が知るべく語彙論の事項としては様々なものがあるが²¹⁾、その中でも特に日本人学習者に有用性のある事項を精査しなければならない。

日本人学習者にとって特に有用性のある事項として、以下に示すようないくつかの点が挙げられる。

- ①「形態素と単語」——意味を持つ最小の言語単位を形態素と言う。中国語の“服”や“夏”、“体”などは単語ではなく形態素である。
- ②「語構成」——単語の構成方法には「主述型」「補足型」「動目型」「偏正型」などがある。その他、接辞を用いる語構成がある。
- ③「語彙の体系性」——一つの語に対しては類義語、反義語、上下位語、関連語等の体系性がある。
- ④「日本語語彙との関係」——中国語の語には、日本語とほぼ同じ語形や語義の語がある一方で、異なる語もある。
- ⑤「附属義」——語には基本義のほかに、「感情義」、「語用義」、「文化義」など、周辺に様々な意味がある。
- ⑥「多義語、多音語」——中国語は原則的に「一字＝一音＝一義」であるが、多くの意味を持つ語や、複数の音を持つ語が数多くある。
- ⑦「特殊語彙」——中国語の語彙には、外来語、新語、成語、慣用語、省略語などの特殊語彙がある。

4.4 語彙学習中心の中級テキストに関するその他の事項

①従来のテキストの構成要素に語彙関連の学習項目を加える

前でも述べたが、現在使用されている一般的な中級テキストは、主に「課文」、「語釈」、「ポイント」、「練習問題」で一課分が構成される。語彙中心のテキストの構成を考えれば、これらの項目の他、もう一つ語彙に関するものを設けるのがよい。中国の国際漢語教育用のテキストでは、課文に対する「生詞表」の他、「词语例解」や“词语例释”²²⁾といった語彙に関する項目が別に設けられている。一課につき10前後の重要語句を取り上げ、それに対して、詳細な語義の説明や文法的な用法、語用的な特徴などが記される。このような国際漢語教育用のテキストに示される語彙に関する項目を参考にして、既存のテキストの「語釈」の形式や内容に上積みした語彙に関する項目を設けることが可能である。

②多義性を持つ語に対する提示方法

前の4.1で述べた点に従い、実際にテキストに取り入れる具体例を一つ挙げる。「課文→語釈→ポイント」という順で配列するテキストでは、多義性を持つ語の示し方が問題となる²³⁾。例えば、課文中に「歩く」という語義で出てきた“走”について、「走-歩く」とだけ示すのか、或いは「走-歩く、行く（離れる）」と示すのかという選択になる。ただ、これら二つの示し方には、いずれにも問題が生ずる。前者を用いれば、後に「行く（離れる）」という語義で“走”が出てきた時も、学習者は「歩く」と解釈してしまう可能性がある。後者を用いれば、課文に相当する語義がどちらなのか学習者にとっては判別が付き難い。また、授業中教師の説明がなければ、なぜ一つの語が「歩く」と「行く（離れる）」という二つの語義を持つのか、という疑問を持たれてしまうことが懸念される。

そこで、前述したように「語釈」を「課文」の前に置くことにより、この問題に関して、ある程度は対処できる。具体的に述べれば、各課の最初に、例えば“走” ①歩く②離れる③動く④この世を離れる」というように課文に出てくる語義だけではなく、一つの語に対し、より詳細に重要な語義を複数示す。その後、課文において、“走”を含む文を提示する。さらに

課の最後の練習問題として、課文に出てきた“走”の語義を、最初に提示した中から選ばせる。或いは直接答えさせるという語彙導入に関する方法である²⁴⁾。このような方法を用いれば、学習者に語の多義性を認識させるだけでなく、学習者が中国語の語と対応する日本語の訳語を一对一の単純な関係で認識することを防ぐ効果も見込める。

5. おわりに

本稿では語彙を中心とした中国語中級テキスト作成を目的とし、中級テキストの現状を調査し、語彙教育についての初歩的な考察を行った。本稿での考察はテキスト作成の過程において、中途の段階にあると位置づけられる。今後は、日本人学習者にとって必要である語彙に関する事項を更に精査した後、実際テキストに提示する内容や形式を考察した上で、作成することを課題としたい。そして、テキストの試用版を作成した後、実際授業等で使用し、その効果を見極めていきたい。

【注】

- 1) 外国語語彙学習における語彙能力に関しては、望月(2003:32～34頁)、中森(2010:229頁)等を参照した。
- 2) 中国の国際漢語教育界においては、『汉语水平词汇与汉字等级大纲』が1992年に公刊され(2001年に改訂)、学習者が学ぶべき8822語が、「甲乙丙丁」の四段階に分けて定められた。近年は新 HSK の実施により、『新汉语水平考试大纲 HSK1 级－6 级』(中国国家汉语办公室／孔子学院总部编制、商务印书馆)が発行され、1 級から 6 級までそれぞれのレベルで合計 5000 語が示されている。日本の教育界においても、中国語教育学会作成の『中国語初級段階学習指導ガイドライン』には初級レベルの学習者用の 1000 語が示されている。
- 3) 例えば、『桥梁－实用汉语中级教程』北京语言文化大学出版社においては、すべての新出単語にレベルが付されている。日本で出版されているものでは、語彙表に示されるそれぞれの単語に対して、新 HSK のレベル(級)を記す『焦点中国』白帝社のようなテキストが見られる。
- 4) 本稿で言う「中級テキスト」とは、初級テキストを一通り学習し終わっ

た学習者向けの既習用のものを指す。大学の授業に照らし合わせて言えば、一般的に2年生以上の授業で使用するテキストで、調査の対象には「初中級」とされるテキストも含めている。

- 5) この「語釈」には傍注や脚注の形式も含めて、カウントしている。
- 6) 実際にテキスト内で使用される名称は、「語釈」についてはその他「語注」、「単語」、「語句」等が見られる。「ポイント」については、その他「要点」、「文法のポイント」等が見られる。
- 7) 解説文がないテキストも見られる。50部のテキストに対する調査では一定量の解説文が記されているのは16部であった。
- 8) 筆者が調査したテキスト50部の「ポイント」部分の項目数は合計2475であった。よって、語彙論に関わる項目の割合はわずか0.76%である。
- 9) この19例の中にカウントしていないが、『中国語見たり聞いたり15章』光生館では、「ポイント（重点）」の他、各課に「比較」と「词句」という二つの学習項目が設けられている。「比較」では、主に類義語、「词句」では、主に多義語や形態素についての学習内容が示されている。
- 10) 「語彙の深さ」については、門田(2006:223-225頁)を参照した。
- 11) 望月(2003:107-144頁)では、語彙指導は「導入・定着・発展」という3段階で考える必要があることが述べられている。
- 12) すべて経済学部所属の学生で、専門外の第二外国語の学習者であると見なせる。
- 13) 筆者が担当する2年生(学習歴一年半)のクラス20名の学期末テスト(2012年秋学期)を用いて、テストの各問題の正答率に関する調査を行った。出題した問題形式は①“听写”、②聞いて意味を選択、③単語(日本語は中国語に直す、中国語は日本語に直す、二つの形式の割合は半々)、④空欄補充、⑤並べ替え、⑥作文(和文を中国語に直す)の計六つである。学期末テストなので、応用問題はなく、すべてその学期中にテキストで学習した内容を出題した。正答率は①66.25%、②91.25%、③69%、④75.6%、⑤56.5%、⑥54.6%であった。③の単語の問題に関しては、範囲を指定して出題したものである。難易度的には、この③の単語の問題が最も低いと思われるが、正答率は70%に届いていない。
- 14) 勿論、全般的に見れば、一クラスに一部のテキストを指定するという方法以外に、二、三クラスで一冊の統一テキストを使用するという方法も考えられる。
- 15) テキスト課文に対する語釈の問題については、王1999、ト2004等を参照した。
- 16) 門田(2006:254頁)では以下のように述べられており、参照した。「語彙の意味導入における母語の利用は大変有効な方法であるものの、徐々

に訳語を介在させない意味アクセスにもっていくと同時に、訳語との意味概念のズレを修正するような指導が必要である。語彙指導において訳語は無条件に排除するべきではなく、むしろ有効に利用しながら、その足りない部分を補っていくべきものである。」

- 17) 日本語と中国語の語彙の関係については諸説あるが、本稿では王(2008:112頁)で示される分類に依拠した。
- 18) 本試作例は2013年7月14日に開催された日本中国語学会九州支部例会における発表資料を一部修正したものである。本発表では、この「単語」の部分のほか、「課文」「ポイント」「練習問題」の例についても同時に提示し、語彙学習を中心としたテキスト課分の例を示したが、本稿においては、紙幅の関係により省略した。なお、試作例における中国語のフレーズや文はすべてインフォーマントのチェックを経た著者の作例である。
- 19) 塚田(1998:104頁)には以下のような記述があり、参照した。「語句指導と語彙指導を区別することがある。その場合、語句指導は読解指導の一環として行われ、当該語句の意味をテキストの文脈に即して限定することが中心となる。『意味調べ』という言葉が代表するように、テキスト中での意味の広がりに対して、一つの語義を選定することが目的である。そのため当該語句をめぐる語彙論的關係が直接話題にされることは少ない。これに対して、語彙指導ではテキスト中での意味を離れ、その語句にかかわる語彙の体系を扱う指導である。多くの場合語彙の拡充が目的で、この場合は意味の広がり自体が話題になる。」
- 20) 明示的学習としての語彙論知識の獲得がある一方で、第二言語習得理論で言われる「気づき」の側面がある。この「気づき」を注視した上で、テキストにおいてどう提示するのか、という点は今後の課題としたい。
- 21) 日本人学習者が学ぶべき語彙論における事項に関しては、万2010、符2004、浅野2012を参照した。
- 22) “词语例解”は《汉语中级教程》北京大学出版社。“词语例释”は《汉语口语速成提高编》北京语言文化大学出版社において見られる。
- 23) 李明(2011:155頁)では、“有些多义词在同一本教材的不同课文中出现了不同的义项，可是，教材处理时只是在这个词作为生词第一次出现时，注释出它的多个义项，而当它以另一个义项的身份出现在另一篇课文中时，却没有任何注释或提示。”といった多義語についてのテキスト導入方法の問題が指摘されている。
- 24) ただ、この方法を用いた場合、量的な制限が問題となり得る。よって特に重要度が高い語を選出した上で、このようなタスクを与えることが必要となる。

【主要参考文献】

- 浅野雅樹2012. 語彙を中心とした中国語中級テキストに関する研究序説, 『下関市立大学論集』第55巻3号: 67-78頁
- 門田修平、池村大一郎2006. 『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店
- 郭春貴2008. 日本の大学二外漢語課程的教学模式探討, 『中国語教育』6号: 19-33頁
- 興水優2005. 『中国語の教え方・学び方—中国語科教育法概説』富山房インターナショナル
- 望月正道、相澤一美、投野由紀夫2003. 『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店
- 中森登之2010 『学びのための英語指導理論—4技能の指導方法とカリキュラム設計の提案』ひつじ書房
- 史有為2004. 中国語教育に於ける語彙の位置付け—中国語教育学研究(その4)], 『明海大学大学院応用言語学研究科紀要』第5巻: 13-32頁
- 沈国威2008. 漢外詞匯教學的量與質, 『陝西大學外國語教育研究』15: 87-95頁
- 塚田康彦、池上幸治1998. 『語彙指導の革新と実践的課題』明治図書
- 卜佳暉2004. 关于对外汉语教材生词处理的思考, 《云南师范大学学报》第2卷第1期: 25-28頁
- 符准青2004. 《现代汉语词汇增订本》北京大学出版社
- 高燕2008. 《对外汉语词汇教学》华东师范大学出版社
- 胡明扬1997. 对外汉语教学中语汇教学的若干问题, 《语言文字应用》1: 12-17頁
- 李明2011. 《对外汉语词汇教学与习得研究》中国大百科全书出版社
- 史有為1997. 伊智地善继先生谈日本的汉语教学, 《世界汉语教学》4: 109-112頁
- 万艺玲2010. 《汉语词汇教学》北京语言大学出版社
- 王顺洪2008. 《日本人汉语学习研究》北京大学出版社
- 王素云1999. 对外汉语教材生词表编译中的几个问题, 《汉语学习》6: 39-44頁
- 朱勇2007. 对日汉语词汇教学研究的现状与前瞻, 《语言文字应用》2: 134-140頁

【調査の対象としたテキスト】(計50部)

- 相原茂、郭雲輝2002. 朋アリ遠方ヨリ来タル, 好文出版
- 荒川清秀1999. 北京の明子, 白帝社
- 荒川清秀、周閔2003. 中国見たり聞いたり15章, 光生館
- 池上貞子2008. 中国ってこんな国—素顔の“漢流”生活—, 朝日出版社
- 岩本真理、王占華、清原文代1999. 現代漢語基礎Ⅲ, 白帝社
- 尹景春、竹島毅、竹島金吾2011. 中国語さらなる一歩, 白水社
- 上野恵司2007. 総合中級中国語, 白帝社

植屋高史、鄭偉、谷川栄子、阿古智子、砂岡和子2011. 焦点中国, 白帝社
 内田慶一、奥村佳代子2012. 中国語への道改訂版, 金星堂
 遠藤光暁、衛裕群、汪曉京2011. リアルタッチ中国, 朝日出版社
 大内田三郎、王占華1998. 困ったときの中国語, 駿河台出版社
 王曙光2003. 中文大世界, 白帝社
 大西博子、魏穂君、大東和重2008. 自分のことばで中国語, 光生館
 小川利康、王延偉2009. 中国語新天地2, 朝日出版社
 郭春貴、郭久美子2012. 実用中級中国語, 白帝社
 加治敏之、孫路易、木村泰枝2012. システマッティック中国語, 郁文堂
 慶應義塾大学商学部中国語部会2007. 大学2年生のための中国語, 慶應義塾大
 学出版社
 関西大学中国語教材研究会2006. 心に残る中国語, 金星堂
 胡金定、荊秉月、衛裕群、鄭萍2009. アクティブ中国, 朝日出版社
 洪潔清、劉郷英2004. 听听说说, 白帝社
 洪潔清2011. チャイニーズアドベンチャー, 金星堂
 崎原麗霞2010. ひとめぼれ中国語、朝日出版社
 佐藤富士夫、柴森2004. 青島の朝, 白帝社
 史彤嵐、金子真也2009. 北京びより, 好文出版
 徐送迎、矢嶋美都子2008. 効果てきめん中国語, 駿河台出版社
 杉野元子、黄漢青2008. 大学生のための現代中国12話Ⅱ, 白帝社
 石慧敏、金子真也2008. 上海びより, 好文出版
 関根謙、陳祖倍2000. 中国語のひとつとき, 朝日出版社
 瀬戸口律子、汪玉林2012. 中国語のかけはし, 駿河台出版社
 張継濱、小川文昭2005. 中国ってどんな国?, 白水社
 張明傑2004. 実用中国語会話, 金星堂
 陳昭宜2010. 中級漢語2, 白帝社
 董燕、遠藤光暁2001. 話す中国語北京編3, 朝日出版社
 東京大学教養学部中国語部会2008. 行人, 東京大学出版社
 豊嶋裕子2006. やさしい中国語中級会話・読み物, 光生館
 奈良行、韓軍、大沼尚子2011. 体感中国, 同学社
 人見豊2004. 中文 Step Up, 白帝社
 馮誼光、王柯、石原享一2003. グループ方式で学ぶ中国語中級編, 東方書店
 平井和子、于小薇2001. 中国語の魅力, 好文出版
 平野和彦、王順洪2007. 感知中国, 駿河台出版社
 三瀬正道、陳祖倍2012. セレクト時事中国語2012, 朝日出版社
 村松恵子、董紅俊2008. 中国の窓, 白帝社
 孟広学、本間史2008. 変化する中国, 白水社

守屋宏則、陳淑梅、劉光赤2007. メグの中国ホームステイ, 同学社
山下輝彦、浅野雅樹2006. わかる中国語4, アルク
山下輝彦、蘇英霞2008. 中国を語る - 文化と生活 -, 金星堂
楊凱榮、張麗群2002. 実力のつく中国語, 白帝社
劉愛莉、連清吉2008. 実用中国語10課2, 白帝社
劉穎、小澤正人、柴森2011.2冊目の中国語講読クラス, 白水社
廖伊庄、利波雄一2001. 楽しく学ぶ中国語, 白帝社

「付記」本稿は平成24年度科学研究費補助金（若手研究B「語彙を中心とした中国語中級教材作成について」課題番号23530242）における研究成果の一部である。